

# 教育研究業績書

2024年 5月 1日

氏名 仙波 希 望

研究分野	研究内容のキーワード	
1. 都市研究	広島、平和都市、ポストコロナル都市理論	
2. カルチュラルスタディーズ	場所の感覚、表象文化論	
教育上の能力に関する事項		
事項	年月日	概要
1 教育方法の実践例 1.1 ピア・レビュー制度の実施	平成31年4月～	担当講義・演習では、レポートを複数回課す場合、必ず「ピア・レビュー」を実施してきた。これは、受講者で複数人のグループをつくり、それぞれのレポートを読みあう中でたがいに「批判」すべき点、「見習うべき」点を指摘しあう試みである。「ピア・レビュー」開催時には通常のものとは異なる特別なディスカッションシートを用意し、それぞれが必要事項を記入しながら、上記のポイントを提示しあう。この制度はとりわけ導入から時間が経つにつれ、めざましい効果を発揮してきた。
1.2 多面的なフィードバックの実施	平成31年4月～	レポート提出のみで終わるのではなく、三方向にわたるフィードバックを実施している。優秀なレポートを執筆した学生には、壇上で自身のレポートを発表する機会を与えている。こうしたエンパワーメントが、レポート執筆にむけたインセンティブとなっている。くわえて全体的なレポート・フィードバックを必ず実施している。ここでは内容以上により形式的な面での指摘、そして、テクニカルな面での改善方法を明示している。パラグラフ・ライティングの方法や、レポートの構造をどうつくるかなど、実践的な面に踏み込むことにより、次回やこれからのレポート執筆に意味をももちうる教育をおこなっている。
1.3 オンライン授業環境の構築	令和2年4月～	2020年4月以降、随時非対面形式での講義・演習をおこなってきた。Microsoft Teamsとzoomを併用し、毎度の課題のフィードバックの実施、質疑応答チャンネルの設置やオンライン上での反転授業の導入による双方向性の担保、録画素材、レポート、そしてライブ配信など様々な形態を複合的に活用した講義スタイルの構築をはかった。所属学科全体のオンライン教育の導入推進担当もつとめている。
2 作成した教科書、教材		
3 教育上の能力に関する大学等の評価 3.1 授業評価および学内評価	令和4年4月	令和3年度の授業評価は平均で3.75(4点満点)であり、学内平均値(3.17)を大幅に上回るものであった。大学側の評価としては全ての年次において総合評価・業績評価ともに「S」評価であり、これは全体の上位約7%に位置するものであった。また担当授業(「コミュニケーション基礎論」)が、令和4年度前期 授業評価に基づく公開授業に選出された。
4 実務の経験を有する者についての特記事項		
5 その他		

職務上の実績に関する事項				
事項	年月日	概要		
1 資格, 免許				
2 特許等				
3 実務の経験を有する者についての特記事項				
4 その他				
研究業績等に関する事項				
著書, 学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所, 発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
(著書) 1 『忘却の記憶 広島』	共著 (編者)	平成30年10月	月曜社	編著。「〈平和都市〉空間の系譜学」を執筆。全体の編集とともに、担当論文では〈平和都市〉理念の生成と相互作用の過程を読み解き、その端緒、成立および系譜、いわば〈平和都市〉化という様相の解明をはかった。都市理念と都市景観の相互関係を、都市社会学や人文地理学による知見をもとに明らかにし、〈平和都市〉による「復興」が孕む空間論的含意を提示した。(pp. 126-173。東琢磨、川本隆史、柿木伸之など計 12 名執筆。)
2 『惑星都市理論』	共著 (編者)	令和3年4月	以文社	編著。「ポストコロニアル都市理論は可能か」および「あとがきにかえて：それでも惑星都市を彷徨するために」を執筆。全体の編集とともに、担当論文ではカリフォルニア大学バークレー校のアナーニャ・ロイらによって主導されるポストコロニアル都市理論の方法論を明らかにすべく、「なぜいまポストコロニアルな都市研究なのか」、「ポストコロニアル都市理論はなぜ必要とされているのか」といった問いのもと議論を展開した。(pp. 185-225、387-401 平田周、大城直樹、原口剛など計 11 名執筆。)
3 『Chim↑Pom 展   ハッピースプリング カタログ第2巻(ドキュメント版)』	共著	令和5年8月	美術出版社	「すべてのものをただしいところに—文化が都市を/都市が文化を殺すとき」を執筆。これまで日本語圏では看過されてきたリチャード・フロリダによるクリエイティブ都市論からの転向、都市空間における「多様性」言説の逆機能性について論じ、ジュディス・バトラーのパフォーマティビティ概念を導きの糸として、日本を代表するアーティストコレクティブである Chim↑Pom from Smapa!Group の改名騒動における意義を、都市理論の観点から詳らかにした。(pp. 136-148。伊藤亜沙、五十嵐太郎、金原ひとみ、アーサー・ビナードなど計 12 名執筆。)

著書, 学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所, 発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
(学術論文) 1「大東亜共栄圏と観光立国の夢: 小山栄三の観光宣伝論に見る『イデオロギーの着脱可能性』について」(査読付)	単著	平成28年1月	『言語・地域文化研究』第22号、pp. 321-328	日本社会学黎明期の泰斗である小山栄三の「宣伝論」を理論的に探求した。「大東亜共栄圏構築」におけるパブリック・リレーションズ的手法の導入や、その最終的な成果としての国際観光ネットワーク構想などを資料体から読み解き、戦前戦後を一貫してイデオログとして活躍した小山の経歴と照合したうえで、戦時期の世論研究から現在のインバウンド・マーケティング的視点に連なるメディア論的視座の水脈を明らかにした。
2「日々の喪失、平和の喧伝: 相生通りと動員される『平和都市』」(招待あり)	単著	平成28年7月	『現代思想』第44巻15号、pp. 116-128	2016年5月のオバマ前米国大統領の広島訪問を手掛かりに〈平和都市〉の都市イメージを手中にしながら復興を果たした広島を、言説、都市計画、メディア戦略の観点から分析した。いつ、そしていかに広島は〈平和都市〉となったのかを問いに据え、実際の都市復興に先駆するように構築され、またその理念をもとに市民動員が図られる過程をコーパスから導出し、メディア論的、集合的記憶論的視点から〈平和都市〉の形成を検証した。
3『『平和都市』の『原爆スラム』——戦後広島復興期における相生通りの生成と消滅に着目して』(査読付)	単著	平成28年9月	『日本都市社会学会年報』第34号、pp. 124-142	戦後すぐから形成されたかつての巨大なバラック街、「相生通り」が「原爆スラム」という呼称をもとに消滅するプロセスを描出した。かつての軍事的中枢が原爆体験により消滅し、都市復興に比してバラック街と化していくなか、ローカルエリートや社会調査、そして地方メディアの特集など、様々な力学のなかで「原爆スラム」と名指されるに至るプロセスを論証した。
4『〈平和都市〉広島をめぐる空間論的研究』(査読付)	単著	平成31年2月	東京外国語大学大学院総合国際学研究科、pp. 1-222	学位論文。本論文は戦後広島における〈平和都市〉理念の生成、この理念による都市形成プロセスを理論と事例の両面から検討することにより、普遍的なアーバンゼーションを駆動する潜勢力の解明を試みた。本論文は第一部「理論的視座の定位」と第二部「事例の検討」、序論と結論で構成される。世界的な都市研究の潮流を踏まえ、アンリ・ルフェーヴルの読み直しおよびミシェル・ド・セルトーの批判的読解を理論的背景に据え、近現代にわたる広島を〈平和都市〉化をめぐるポリティクスの全容を明らかにした。

著書, 学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所, 発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
(学術論文) 5 「惑星都市彷徨 —— ウィルスの蔓延する街路を踏査することは可能か」(招待あり)	単著	令和2年9月	『建築討論』(令和2年9月1日公開)	「特集:感染症と都市地理学 —— コロナ危機以降の「再-距離化世界」」へ寄稿。COVID-19のパンデミックの最中における都市研究の方法論を歴史的に再検討した論考。フリードリヒ・エンゲルスの社会踏査、高野岩三郎の主導した「月島調査」を題材に、公衆衛生問題と(これまでの)パンデミックの最中に生まれた都市研究のあゆみを読み直し、ガヤトリ・C・スピヴァクによる世界化 worlding のポリティクスを媒介とする新たな空間論的視座を提示した。 <a href="https://onl.la/sCr1zLw">https://onl.la/sCr1zLw</a>
6 『『大広島』と近代都市の夢——『復興』メディアイベントの起源を遡行する』(査読付)	単著	令和4年3月	『広島文教グローバル』第6号、pp. 31-46	1920年代後半に提唱された「大広島」と、それを具体化すべく展開された1929年の昭和産業博覧会を対象に、その内実と含意を明らかにすることをおして、本論は原爆体験という出来事をも貫通した都市復興のダイナミズムの端緒を描出した。『大広島の建設』などの刊行資料、『中国新聞』といった地方メディア、観光地図などの宣伝媒体を資料体に、近現代広島の都市像が彫琢されるうえでのひとつの源流の痕跡を提示した。